ひとは自分で自分を変えていく

「私は仕事をやめようと思います」。ある母からの手紙の書き出しである。某市の優れた老人ホームで中心的働きをしている彼女は、高校生の息子の非行が高じ、学校からの呼び出しも頻繁、ついに仕事も手につかなくなっての結論である。

私はすぐ便りした。―今やめては息子のせいになる。人前だけを気にして息子を責めるな。息子の唯一の味方は母である君だけだ。髪を黄色に染めようが、刈り上げようが、それは息子のせめてもの自己主張。息子のためにひたすら祈ることだ。祈ればまず母の自我が洗い落とされ、本当の祈りになっていく。息子はきっと分かるようになる。人間とは自分で自分を変えるものだ。

半年たった。「長女と問題の息子がホームのボランティアをさせてもらいました。数日後、息子が言うのです。おふくろさん、大変な仕事をしているんだなー、やめるなんて言うなよなと。学校では掃除なんかしないのに、モップでけんめいに働きました。お年寄りがこぼれんばかりの笑顔で息子の手を離さなかったんです。私は泣けて

泣けて…親子は尊い経験をさせて頂きました」。

それから半年。「少しずつですが息子も前向きにその子なりの人生を歩き始めています。学校の先生のおかげです。私が福祉で頑張った分、教育の分野からお返しを頂いたような運命（めぐりあわせ）を感じます。これからも言われた通りひたすら祈り続けます。元の『ハリキリ〇〇子』に戻ったと仲間たちも励ましてくれます」

（一九九四年十一月二十四日）